
Last snow

黒雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L a s t s n o w

【Nコード】

N 4 5 5 4 D

【作者名】

黒雪

【あらすじ】

妹だけに見せる笑顔を持ち、他の者は拒絶する。そして、あまりに高い身体能力を持つ。そんな天夢と秋菜が送る、明るく暗い物語。

見えない冬

第一章
..
見えない冬..
..

限りなく、深い闇。

そこには、光は無く、

音が生まれる事も無い。

ただ、静寂と絶望のみが

支配していた。

そして俺もまた、

そこにいた……

不思議と、怖いといった

感情が生まれて来ること

は無く、歩き回ろうと
いう考えさえ浮かばない。
ただひたすらに

闇を見つめていた。光という存在を、

思い出しながら・・・

$$\begin{array}{c} \lceil \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \triangle \\ ? \\ \rfloor \end{array}$$

眩しい。今は

夢
・
・
・
か？

そんな事を考えて
いると、目覚ましの
ベルが鳴り

カチツ、つとボタンを押して止める。

「とりあえず起きるか。」

そう言い、布団から

出てまず時計を確認。

針は7時ちょうどを

指していた。

「ウム、早めに朝食を作っておくか。あいつを待たせたくないしな。」

L

俺はまず服を着替え、部屋にある鏡を見ながら髪を少し整

えた。

ちなみに言うと、

着た服は、上は青の
長袖、下は少し黒っぽい
感じのジーンパンだ。

俺は基本的に、家では
いつもこの組み合わせ
の服装で過ごしている。
今日も例外ではない。

・・・身支度が済むと
階段を下りた。
部屋のドアを開け、

俺の部屋は二階に
あるため、台所のある
一階まで行くには

階段を下りる必要が
あるのだ。
台所にたどり着き、

早速 朝食の支度を
始める。

・・・そう、この家の
食事は全て俺が作って
いる。普通の家庭なら
母親がやる仕事だろう。
だが俺は、

17歳の身

でありながら、この家
の、食事、洗濯、掃除
の仕事をこなしている。
というのも、俺には

親がないから・・・
いや、正確には父親は
生きているのだが・・・

「・・・くそっ！」
思わず手にしていた
包丁をまな板に
突き刺してしまい、
ドスッ、という音が
台所に響いた。

正直、俺は父親に

好意を持っていない。

持てるはずがない。

詳しい事は知らないが

母親が死んだ日、

あの日の記憶は薄れる

事なく、今だ頭の中に

残っていた・・・

|| || || || || || || || || ||

「これは殺人事件ですね」

警察官の言葉が頭に

響く。目の前には、

体を所々 ナイフで

切られた母親が

横たわっていた。

「一応、病院の方に

送っておきます。」

その言葉を聞いて、

一瞬我に帰り

父親の姿を捜す。

こんな悲惨な姿になって

いるが、せめて今は

父親と一緒に見送って

あげなくては。

そう思ったのだ。

しかし・・・

「あれ、父さんは？」

どこを捜しても父親の

姿は見えない。

どこかに隠れて

泣いているのだろうか？

でも、やはりちゃんと

見送ってあげなくては

いけないよな・・・

そんな事を考えている

時だった。警察官の

話し声が聞こえてきた。

「まだ調査中ですが、

「あ、ほんとだ！

おいそー♪」

「まあ、実際にうまい

んだからな（ω」）」

「兄さん、自分でほめる

のはどうかと思うよ？」

ちよつと呆れた顔を

しながら言われて

しまった。

「だか、美味しいだろ？

俺の肉じゃが。」

そう、俺が今つくって

いたのは肉じゃが

だったのだ。実を言うと

肉じゃがは俺の1番の

得意料理でもある。

「うん、大好き！

でも………」

「ん、何だ？」

「他の料理が……ヘタ。」

（ガーン！！）

「そ、そんなにズバリと

言わないでくださいよ。」

落ち込むと何故か敬語に なる俺。実

は、肉じゃが だけはプロ並だが、

他の料理は もはや

冷凍食品にも及ばない。

「え、じゃあ……、お腹が空いてる時

なら割と

美味しい……よ？」

って、微妙！しかも

‘割と’ って何すか？！

「もういいよ……」

早く飯食べちゃおう。」

「あ、そだね。」

遅刻したら大変っ！」

「じゃ、秋菜はそこに座っててね。」

そう言うと、俺は皿に肉じゃがを盛り始めた。秋菜を見てみた。

服は、いつもどうりのもは大きくて

パッチリしているが、

寝起きだからか 今は

半開きで、少しトロント

ロングで、髪が背中の

真ん中あたりまで

まっすぐにのびている。

としている姿を見て、

かわいいなあ などと

考えてしまう。

「兄さん、まだあ？」

秋菜が不思議そうな

顔をしながら聞いて

くる。どうやら、

少しの間手を止めて

いたらしい。

「ああ、今持っていく。」

盛り、秋菜のいる机の

上に置く。

「どーぞ。」

「えへへ、

いただきますーす」

待ってましたといわん

ばかりに、すかさず

横目で、チラリと

上下桃色のパジャマだ。

目は、いつ

している。髪の毛は

寝癖を一生懸命直そう

フォークを手に取り
食べ始める。

「うん、美味しい！」

「ウム、そうだろ。」

「なんか、兄さんの

肉じゃが、何て言うか、

こう・・・お口の中に

キュッ　　ってくるの。

キュッ　　って！」

キュッ・・・ですか？

ずいぶんと表現方法が

豊かだなあ。

「うーん、それは多分、

隠し味に入れたお酒

のおかげかな？」

「えっ、お酒が

入ってるの？どうしよ、

秋菜まだ11歳なのに！」

口を押さえながら

困った顔を

している。

沸騰させているから

アルコールはもう無い

のだから、一人で慌ててる

秋菜を見ていたら少し

意地悪して

みたくなった「なに、それは大変だ！」　手を上にあげて、少し

オーバーに

反応してみる。

「ど、どうしよう・・・」

混乱しているせいか、

俺の大げさ

な反応に

ツッコミを入れる事無く

ただオロオロしている。

「早くしないと警察が来て捕まってしまうぞ！」

「ええゝゝゝ

！？」

すると、少し目を

潤ませながら・・・。

「に、兄さん・・・

秋菜、兄さんと会えなく なっちゃうの

？」

「安心しろ、ちゃんと面会に行つてやるから。」

「でも・・・ずっと離れて暮らすの？」

朝起きたら　おはようって

言えないの？兄さんの肉じゃがも・・・　食べれない。いつもの

楽しい日々も、どっか

遠くに行っちゃうの？

秋菜、そんな

の・・・」とうとう泣き出して　しまった。そろそろ
可哀相になってきたな。

「そんな事言うなよ！」　そう言い、俺は秋菜に　抱き着いた。

「に、兄さん!？」

「遠くに行くなんて　言うな!だって・・・　俺は・・・

・・・」　そこで言葉を切り、肩を　抱く手に力を入れた。　「・・・

・兄さん。」　秋菜の目がまた潤んで　きた。心なしか、今

度は　顔が少し赤い。　「だって・・・　ウソだも

ん(ω「」　一瞬、空気が止まる。　「・・・ふや?」

もう一度。　「ウソだもん。」　「・・・

・・・」　「ウソだもん。」　かなりしつこい俺。

そして秋菜の顔は　さっきと変わっていて、　少しムス

ツとした　感じになっていた。　「し、知ってたもん!」

「・・・ウム?」　「だ、騙されたふりして　あげてただけ

だもんっ!」　・・・秋菜、　分かりやすすぎ!

「ああ、知ってたぞ。」　「え?」　「だから、秋

菜は、俺が　騙してるのを知っていて、それを知ってたのに

俺には知らないふりをして騙してたんだろ?」

「・・・う、うん。」　「でも、俺はそれも気付いていて、でも

気付いてないフリをして騙したんだ。」　かなりいい加減だが、

秋菜には通用したらしく　少し考え込んでいる。　そして・・・

「そ、それ知ってた!」　・・・って、

かなり無理がない?　「じゃあ俺も・・・　それ知ってた。

」　「ええゝ!?!?・・・えっと、それ知って・・・たよ?」

「それ知ってた。」　「それ知ってた!」　「それ知っ

てた。」　「それ知ってた!」　「・・・」

「・・・?」　「なあ、秋菜?」　「な、なに!

?」　「学校・・・ヤバくない?」

「・・・(□)。」　「・・・(ω「」　こうし

て、今日という　一日が始まるのだ。　「ちょっと兄さん!

勝手にまとめないでよ!」

「学校に遅れるぞ?」 「うゝゝゝ」

イト☆ 「もうっ!」

「……行っ

たか。」 食器を片付けながら、 学校へと向かう秋菜の

姿を確認する。 「……よし。」 食器を全て

洗い終えると 自室へ行き、服を着替える。

下はそのまま、上は青 から黒に変える。

さらにその上に革の コートを羽織る。色は黒 で、少し薄
めである。 丈が長いので、マントの ようにも見える。

着替えが終わると、机の 上に置いてあった銀色の リングをズ
ボンのポケッ トに忍ばせ、玄関の前 まで歩いていく。

「秋菜は3時過ぎに帰って来るからそれまで、か。」 誰に語る訳
もなく呟くと 玄関のドアを開け、外へ 出た。同時に、空を見上
げる。 「……暗い……な。」 空は、果て

しなく曇って いた。太陽の光を見せた くないかのように……

第一章 完

第二章に続く。

見えない冬（後書き）

このあと、いよいよ天尋の力が明らかに！
です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4554d/>

Last snow

2010年10月29日10時27分発行